認定特定非営利活動法人（認定NPO）

インド福祉村協会 会報

2018.8.1
Vol.31

India Welfare Village Society News

http://iwvs.jp/ インド福祉村協会 検索 E-mail／info@iwvs.jp

特定寄付金に税制上の優遇措置が認可（ボランティア募集中）

会報31号 記念版

（インド福祉村協会 設立30周年）

2018年10月で アーナンダ病院は 開院20周年を迎えました

（記念式典参加者）

（病院 建設）

（病院 建設）

インド福祉村病院（アーナンダ病院）20年間のあゆみ

1. 1997年　病院建設、工事着工、2年間
2. 1998年（1年目）　4月 P、N、GUPTA着任、11月診療開始
3. 2000年（3年目）　郵政省Volunteer貯金、結核、ポリオ、婦人妊婦、無料治療開始
4. 2001年（4年目）　外務省草の根資金、生化学検査機器、超音波診断装置、エコー、小手術室、設置
5. 2002年（5年目）　郵政省VOL貯金で、マラリア治療、喘息、トリコモナス、結核、風土病、無料治療開始
6. 2004年（7年目）　認定NPO法人認可、X線自動現像機、生化学分析器、発電機、外務省草の根資金支援
7. 2007年（10年目）　JICA草の根支援事業開始（jpp事業）開始3年間、農村民への保健衛生指導、婦人妊婦健診
8. 2008年（11年目）　新教育ホール建設、母子健康手帳配布、学校衛生教育。頭シラミ無料治療開始
9. 2010年（13年目）　JPP事業継続、　JICA基金、マラリア、結核、トリコモナス、無料治療開始
10. 2012年（15年目）　インド日本人会Volunteer援助、新自動生化学分析装置寄贈、新自動血圧計開始
11. 2014年（17年目）　1年間診療患者2万2千名達成、開院15周年、開院記念祝賀会開催
12. 2016年（18年目）　開院以来総患者35万人達成（3月）自動検尿機器寄贈
13. 2018年（20年）　第2回JICAJPP事業開始、農村民への糖尿病啓蒙、啓発運動開始

ホームページもご覧ください。

http://iwvs.jp/ インド福祉村協会 検索

アーナンダ病院やインド福祉村協会の情報はもちろん、動画でも現地の様子を見ていただくことができます。

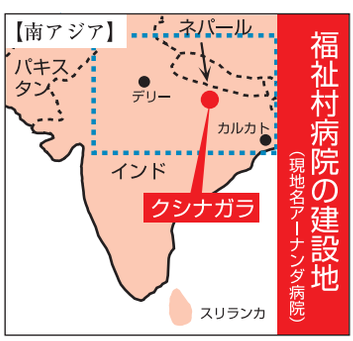
2017年1月～2018年7月のあゆみ（H29.1月～H30.7月）

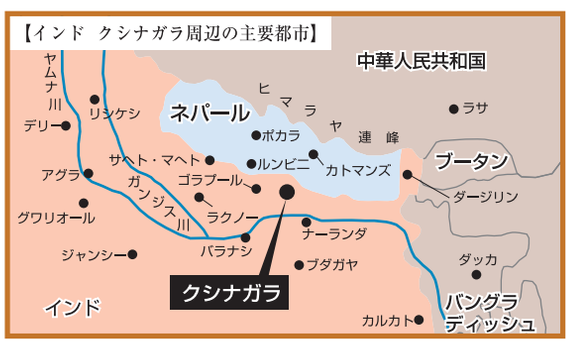
17.3月	● IWVS理事会、 ● ND 日本人会ポケット尿検査機器寄贈 ● 糖尿病患者啓蒙活動カード作成	2月	● 第2回JICAJPP事業（糖尿病啓蒙活動契約締結、開始 ● 病院診療費増額 日曜日休診変更
5月	● IWVS理事会、通常総会（名古屋）、大竹理事現地訪問 ● 山本理事長現地訪問、菊池現地訪問 ● 香西（映画監督）、宮永（カメラマン）映画撮影	3月	● ACTY S5名研修、八幡弥貴也、池谷謙吾、大石有香 牧本明久、北見直紀
8月	● 大竹理事現地訪問、病院看板5枚塗替え	4月	● アーナンダ病院開院20周年記念、 DRGUPTA、Ms NIDHI日本研修 ● JICA中部宿泊、名古屋会会食会 豊橋メイツC、福祉村病院、研修
9月	● IWVS理事会　映画、動画完成	5月	● 大竹理事現地訪問、JICAJPP事業発展、さわらび荘4名 現地訪問 ● 白井秀明、船藤悠太、鈴木あきよ、浦野いづ美
12月	● IWVS理事会	6月	● 井下かりん看護師現地訪問、JICAJPP事業発展
18.1月	● 大竹理事現地訪問、病院前の壁傾斜、待合倒壊		

（子どもたち）

（会議風景）

（グプタ医師の息子さんたち）





（スタッフ一同）

現地住所	ANANDA　HOSPITAL　TEL:91-92354-24671／91-5564-217544 住所:VILLAGE SIRSIA DIST KUSHINAGAR　274403.UP.INDIA

入会のお願い

正 会 員:年会費 5,000円 …… 総会の議決権があります。協会の会報を毎回お届けします。プロジェクトの進み具合、現地の情報を逐次お知らせします。現地宿泊の便宜を図ります。

賛助会員:年会費 1,000円 (一口以上) 総会の議決権はありません。協会の会報をお届けします。

特別会員:　100,000円 (一口以上) 代表一名を正会員として登録します。その他正会員と同様。

寄付会員:　円 ※自由な金額を寄付できます。

【会費・寄付の支払い方法】

郵便振替　口座番号:00830-2-65008　加入者名:インド福祉村協会

郵便振替用紙を利用し、最寄りの郵便局より手続きを行ってください。ご一報いただければ振替用紙をお届けします。

銀行振込　ゆうちょ銀行　口座番号: 0065008　支店名: 089　口座種別: 当座　加入者名: 特定非営利活動法人インド福祉村協会

入金が確認されましたら領収書をお送りします。寄付金は、税制上の優遇措置が受けられます。

募金のお願い

少しでもあなたの善意を
分けて下さい。

東海ろうきんのNPO寄付
システムもご利用いただけます。
http://tokai.rokin.or.jp/shakai/npo.html

ホームページからクレジットカードで決済ができるようになりました。詳しくはホームページをご確認ください
ホームページ／http://iwvs.jp

インド福祉村協会（INDIA WELFARE VILLAGE SOCIETY）
理 事 長／山本左近　専務理事／髙木元昊　常務理事／大竹紘一
理　　事／三木隆治、伊藤孝道、中村義博、田中久子、K･L･バハール、樋口恵子、加藤伸也、吉田晃
事務局長／請井政広
ホームページ／http://iwvs.jp　E-mail／info@iwvs.jp

■発行者　インド福祉村協会（IWVS）
■発行人 山本左近　■編集 大竹紘一　■協力 文創社
■インド福祉村協会事務局
〒441-8124 愛知県豊橋市野依町字山中19-14
TEL:0532-46-7511　FAX:0532-46-4899

福祉村病院　リハビリ部

船藤 悠太

2018年5月22日から26日までインド福祉村アーナンダ病院へボランティアに参加させて頂きました。5月のインドは気温が40度を超え非常に暑い日が続きましたが、グプタ先生は早朝から夜まで休みなく診察されており、周囲の村の人々にとってなくてはならない存在だと思いました。グプタ先生の診察も見学させて頂きましたが、村の人々の経済状況等の理由から必要最低限の検査しか行えない中で、老若男女問わず様々な疾患を的確に診られており医師としての技術の高さを感じさせて頂きました。

また非営利活動法人のため通常の医師よりも低い報酬であるにも関わらず、地域の人々の事を第一に考え、医療に携わっている姿勢に大変感銘を受けました。今回このような素晴らしい機会を与えて下さった医療法人さわらび会、快くボランティアを引き受けて下さったグプタ先生はじめアーナンダ病院の職員の皆様、インド出発前からご支援下さった大竹常務理事に感謝申し上げます。

研修レポート　2018年3月

アーナンダ病院研修　　アクティシステム　5名

大石 有香

慣れない土地での生活が続いていたのでそろそろ体調を崩すのでは…と不安な気持ちで病院に向かっていたのを覚えています。病院では診察を見学したり、付近の村に連れて行って頂きました。病院には診察時間前から多くの人が詰めかけており、この地域の人々にとってアーナンダ病院がとても重要な存在だという事を知ることができました。また、病院付近の村は、校舎のない学校、わらぶき屋根の家、放し飼いのヤギ、自給自足の生活など私にとってはテレビの中の世界が広がっていました。ムンバイやアーメダバードのオフィス街周辺との違いに衝撃を受けると同時にインドの生活格差、貧困問題を自分の肌で感じることができました。

（門前で受付を待つ患者）

池谷 謙吾

グプタ先生は普段はとても陽気な方で、朝晩の食事をご一緒させていただいたのですが、つたない英語に対しても寛容に接してくださり、同じ食卓を囲ませていただくことがとても楽しかったです。食事の際以外はとてもご多忙なご様子で、グプタ先生の仕事がこの地域を支えているのだとたいへん感じ入りました。

グプタ先生とのお話の中でとても印象的であったのが、貧困、病気、教育のトライアングルというお話です。それらの改善がインドには必要になるそうです。。それでも、子供のための学校はあり、アーナンダ病院も存在するという状況です。インドの人々が貧困から抜け出す第一歩として病院が必要なのだと思います。

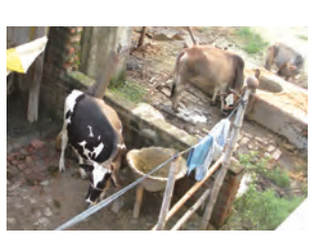
（7つの心）

八幡 弥貴也

アーナンダ病院が位置するクシナガラは都市部のムンバイやデリー、アーメダバードに比べ非常に閑静な印象を受けました。病院のスタッフの皆さんの優しさに感激しました。毎食用意してくださったり、出発時間等を私達に合わせてくださったり、皆さんとても親切で非常に感謝しています。また、病院付近の村も見学させて頂きました。自給自足の生活が当たり前で、日本に住む我々では想像もできないような生活を送っており、とても感心させられました。また、笑顔が多い印象を受け、非常に素敵な村だなと感じました。

北見 直紀

病院では医療の知識はない私ですがグプタ医師が診察をしているところを見学させていただくなど中々経験することができないことをさせていただきました。周辺には畑が多く豆やトウモロコシ、ショウガなど多くの作物を育てていることを教えていただきました。実際に食事では畑でとれた野菜を食べ、自分たちの食材は自分たちで作っていることに感心させられました。周辺には村があり多くの人が生活していました。実際に訪問した際には子供たちが集まってきてくれるなどとても楽しい時間を過ごさせていただきました。


（家の水牛）

牧本 明久

クシナガラには数々の村があり、村の人々は自分たちで作った藁やレンガの家に住んでいます。私がナマステと言って彼らに向かって手を合わせると、重たい氷が解けたように忽ち笑顔になり、後ろに十数人もの子供たちがついてきました。そんな純粋な人々の住む町でグプタ先生は働かれていました。

医師はグプタ先生ただ一人で、待合室には何十人もの患者さんが待っていることもありました。グプタ先生が町の皆さんから信頼されている証だと感じました。普段のグプタ先生はとても陽気な方ですが、診察の現場を見せていただいた際の先生は真剣そのもので、患者さん一人一人に対して一切の妥協もせずに向き合っていらっしゃいました。

（診察受付）

（血液検査官）

アーナンダ病院20周年記念式典の開催

事務局長　請井 政広

2018年4月28日豊橋芸術劇場PLATにてインド福祉村協会のインド・アーナンダ病院の20周年記念式典並びにインド福祉村協会活動30周年記念式典が行われました。

式典には設立以来の院長であるグプタ氏が来日し、長年にわたる日本の皆様への感謝の気持ちを述べられました。映像による現在のアーナンダ病院の様子が紹介された後、これからのアーナンダ病院の果たす役割について、山本左近理事長とグプタ院長との対談が行われ、これからは世界の医療過疎地域の先駆者としての役割を推し進めていくことが話されました。その活動のはじめとして2018年2月から3年間のJICA草の根支援事業「インドの農村地域における糖尿病改善・予防プロジェクト」の実行計画がグプタ院長から発表されました。式典にご参加いただいた皆様とグプタ院長と対話の時間もあり、大変有意義な式典となりました。

今後もインド福祉村協会の活動にご理解いただき、引き続き皆様のご支援のほどよろしくお願い申し上げます。

（三木医師による研修）

（山本理事長・三瓶理事）

（グプタ院長）

JICA研修・勉強会報告

理事　三瓶 宏一

2018年4月25日から27日の3日間、豊橋メイツクリニックの会議室において、今回のJICA草の根技術協力プロジェクトの進め方に関して集中的な研修・勉強会が開催された。参加者はインドからグプタ医師、前インド福祉村協会会長で、豊橋メイツクリニックの三木先生、インド福祉村協会事務局の請井氏、遠隔医療担当の三瓶、そしてJICA中部から江口氏であった。まず三木氏から今回のプロジェクトの主旨である、なぜ今、糖尿病対策がインドの農村部で必要かをプレゼンテーションにまとめ、関連の方々に説明する資料とした。また具体的に巡回指導すべき村を30とし、延べ1500人規模の糖尿病スクリーニングの母集団を特定し、その中で潜在的な糖尿病患者を特定・追跡して必要であればアーナンダ病院に診察に来させると言った流れと、それに携わるべき病院スタッフの役割を再確認した。スケジュール感としては左記の写真のようなタイミングで30村を巡回する方針が決定された。アクションプランとしては、最初に現地で、そもそも糖尿病とは何か、またその予防のための生活習慣改善を啓蒙する資料を5月末までに現地で作成することから始めることになった。8月には可搬型の身長体重計などを日本から持ち込み、実際の身長・体重・血圧・腰回りのサイズなどの基礎的な健診データの収集ができるトレーニングを始める予定である。11月の全世界規模での糖尿病予防Dayにはアーナンダ病院や周辺の病院も巻き込んでライトアップするなどの啓蒙活動も三木先生から提案された。このスケジュールに従って、5月31日に、4人のアーナンダ病院スタッフが最初の村を訪問し、活動が開始された。

（5月末に最初の村を訪問し、糖尿病予防の啓蒙パンフレットを村長に渡すアーナンダ病院の4人のスタッフ達
<R.P. Singh, Rubinak, Satish, Jai ram>）

JICAJPP事業が正式契約になり、3年間農村地区の住民に糖尿病知識を深める活動を開始しました

1. 事業名（事業実施期間）
（Project Title/Duration）

インドの農村地域における糖尿病予防・改善プロジェクト
Project on prevention and control of diabetes in village area in India

2. 事業実施団体名
（Name of Organization）

特定非営利活動法人 インド福祉村協会
India Welfare Village Society (IWVS)

3. ターゲットグループ
（Target Group）

インド国 ウッタルプラデシュ州 クシナガラ県 アーナンダ病院職員15名、及びアーナンダ病院近隣の30農村地域の住民1500名
15 Ananda Hospital Staff and 1500 villagers in 30 target villages around Ananda Hospital Kushinagar District, Uttar Pradesh State, India

診察の記録

アーナンダ病院　グプタ院長

19年間で約40万人の患者を診察してきました。特に患者の治療と教育に注意して笑顔で話をしてきました。最近の傾向は季節によって増減いたしますが1日70名～100名の患者が来院いたします。特に重症患者が減少して、早めに、軽症のうちに来院する患者が多くなりました。農村民の意識改革が大きく変わりつつあります。生活レベルも向上してきました。

しかしながら不可触民と言われる貧民はおおく格差が広がっております。

高血圧、糖尿病などの成人病が増加傾向にあります。

最新の医療機器も多くなりましたが、検査代が高価で実施できないのは今後の課題でしょう。

（小学校衛生教育）

（診察）

【患者数】男性36%　女性64%　小児10%

	1年目	2年目	3年目	4年目	5年目	6年目	7年目	8年目	9年目
総患者	15,310名	21,140名	18,606名	16,910名	20,636名	22,578名	21,573名	21,275名	15,310名
新来患者	6,756名	7,946名	6,247名	5,593名	7,547名	8,191名	8,274名	8,143名	6,756名
再来患者	8,554名	13,194名	12,359名	11,317名	13,089名	14,387名	13,299名	12,800名	8,554名

	10年目	11年目	12年目	13年目	14年目	15年目	16年目	17年目	18年目	19年目	統 計
総患者	24,237名	22,548名	22,623名	18,287名	19,519名	19,212名	20,457名	22,366名	22,312名	22,321名	395,660名
新来患者	9,680名	9,217名	9,245名	7,452名	8,161名	7,897名	8,970名	11,370名	11,935名	11,856名	163,708名
再来患者	14,557名	13,331名	13,378名	10,935名	11,358名	11,315名	11,487名	10,996名	10,377名	10,464名	231,952名

遠隔医療　自動血圧測定　最新報告　2018年7月

インド福祉村協会　理事　三瓶 宏一

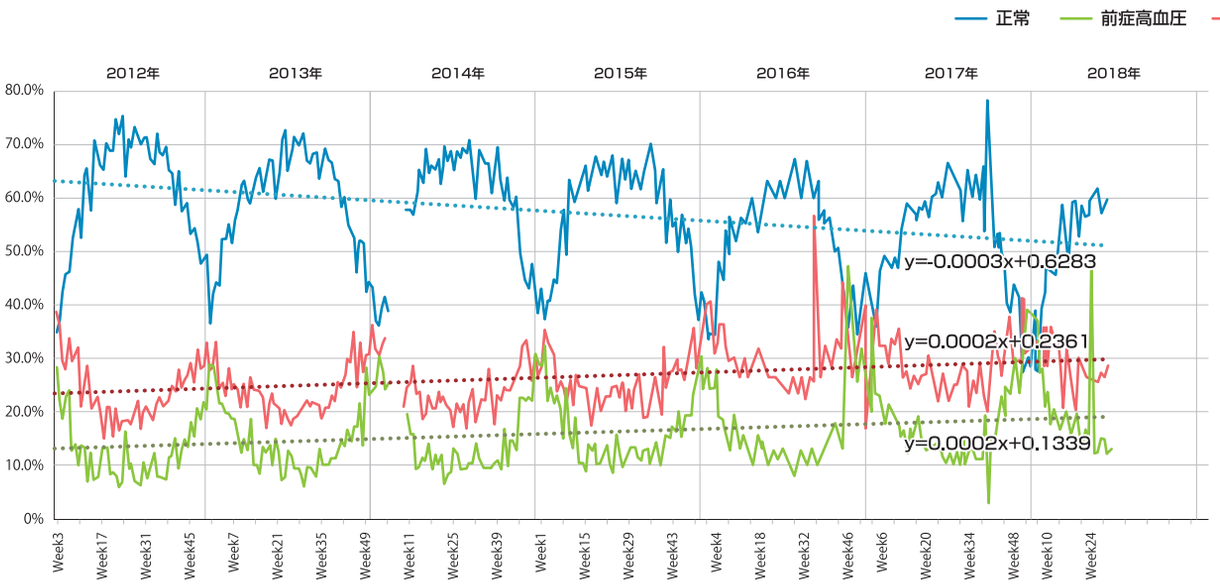
2012年1月から開始した自動血圧測定機による血圧測定患者数は2018年7月14日現在で累計88713名に達している。以前から報告している血圧正常値（Ｎｏｒｍａｌ）の患者の割合の減少が更に進み、ここ6年で全体の割合で11％減少している。高血圧患者数の推移から見ると、最高血圧１４０ｍｇ、最低血圧90ｍｇ以上の定義の高血圧患者（Ｈｙｐｅｒ）の割合は全体の19％と、ここ6年で6％増加している。

下記は2012年1月から2018年7月14日までの5年1か月の、1週間毎の血圧患者の血圧を、正常（青）、前症高血圧（黄緑）、高血圧（赤）の3つの割合の変化を表したものである。正常値は夏の気温が高い時期には測定室は平均気温が35℃程度になるが、その頃には測定数全体から見て正常値を示す患者の割合が70％近くまで上がるが、1月ころには平均気温が20℃以下になってくると、その割合が40％台まで落ちて来る。よってグラフのような夏にピークが来る繰り返しが7年分で7回観測されているのがわかる。

これからいよいよＪＩＣＡ草の根技術協力事業が始まり、まだ病院に来ていない村の潜在的な糖尿病患者を見つけ出し、生活習慣の改善の啓蒙活動をして行くが、それによりこの高血圧患者の割合の上昇傾向に歯止めがかかることに期待している。

（自動血圧測定）

（家族の診察）



研修レポート

看護師　井下 かりん

アーナンダ病院における部落訪問、JICAJPP事業に参加して

今回アーナンダ病院は3年ぶり2回目の訪問、6月18日から5日間滞在させていただきました。ドクターやスタッフ皆が私のことを覚えていてくれて本当に嬉しく思いました。私は今回部落訪問、JICAJPP事業に関わらせて頂き、村の人たちの暮らしを間近にみることができました。まず感じたのは、インドの経済成長は著しいにも関わらず大都市と村ではインフラ、教育、医療様々な点で大きな格差があることを実感しました。しかし部落訪問して感じたことは人の温もりでした。暑い日だったこともありましたが言葉の通じない私に水を出して必死にうちわで扇いでくれるなど笑顔の心遣いがありました。正直なところ豊かな暮らしをしているわけではありませんが村の人たちは決して不幸なわけではなく、人とのつながりや互いを思いやること、神様を信じることで幸せを感じるのかもしれません。インドは信仰の国と言われているように、人の生活と宗教が密接ですが今回部落を訪れて肌の色や、宗教が違っていても人を思いやる心、相手に親切にする心に壁なんてないのだということを心から実感しました。本当に今回は貴重な体験をさせていただき感謝します。今後も学んだことを生かして看護師として精進していこうと思います。

（家庭訪問）

（子供達と私）

（家族一家）

（部落訪問）

研修レポート

「インド福祉村協会　ボランティアツアーに参加して」

第二さわらび荘　看護師　鈴木 あきよ

インドの人口は1３・２４億人（日本の13倍）の大国であり世界第二位をしめる。首都デリーは、世界各国のＩＴ企業が進出している大都会であるが、格差が激しく、クシナガラにあるインド福祉村病院は、デリーから飛行機で2時間、ゴーラクプル空港で降り。そこから車で東方55kmの農村地帯の中にあった。

クシナガラでたった二人の医師グプタ先生は、他14名の医療スタッフと共に毎日60～１００名の診療にあたっていた。グプタ先生の専門は小児科であるにも関わらず、耳鼻、眼、整形、メンタルと総合診療と治療を行っていた。ゴーラクプルでたった一人のエコー認定医でもあった。ＩＴを使いこなす「スーパードクター」でもあり、地域医療を支える「赤ひげ先生」でもあった。近年は糖尿病が急増し、その予防と指導に奔走されていた。

今回の研修にあたり、インド福祉村協会の歩みと活動実績を深く知ることができた。

１９９８年の開院当初より「インド福祉村病院」は、地域のインフラの拠点として、インド政府への働きかけとともに、インド人スタッフの知識向上の為に、日本への研修、婦人から妊婦への衛生指導、学校保健衛生教育を段階的に行っていった事によって、衛生的な村への改善に繋がっていった事を知った。

「インド福祉村協会」の皆様の想像を絶する尽力の賜物として実証されていた。「みんなの力で、みんなの幸せをねがい」善意の輪を広げる重要性を実感した。

障害者支援施設あかね荘　支援員　浦野 いず美

アーナンダ病院の印象は思っていたよりも、設備が揃っており綺麗だと感じました。周りの村を案内していただきましたが、病院は格別に丈夫で掃除がしっかりとされておりスタッフの方々が大切にされているのだと実感しました。ドクターは一日に１００人近くの患者を休憩も取らずに診ていました。外傷、精神疾患、糖尿病、皮膚病、様々な症状を簡単な診察で診断しており医療技術の高さに驚きました。

ドクターはクシナガラで唯一エコーの資格を持っていると聞きました。よりドクターの技術を生かすために エコーを導入できたらと思いました。その為に、日本でアーナンダ病院についてたくさんの人に知っていただく事が必要だと感じました。アーナンド病院は村の人々にとっても大切な存在です。今後もアーナンダ病院の存続を心より願っています。

さわらび地域包括支援センター　白井 秀明

インド福祉村病院（現地名アーナンダ病院）は、少数精鋭という言葉そのままの病院でした。日本の病院のように最先端の機器が揃っているわけではなく、エアコンなどもありませんので利便性や快適性といった部分では、比ぶべくもありません。しかしながら、唯一の医師であるグプタ先生を始めとするスタッフの方々は20人に満たない人数でありながら、それぞれの責務を全うする意識の高さに驚嘆しました。特にグプタ先生の医学的知識や経験、技術の高さはもちろん、医療に対する熱意やバイタリティというものは、まさにスーパードクターという名前が相応しいように思われました。

（玄関で待つ患者）

（参加者全員）

（自動血圧測定）

（診察）